

# インタビュー調査からみた静岡県浜松市の多文化共生

## Multicultural Society of Hamamatsu City as Seen from Interview Surveys

斎藤 敬太・甲賀 真広・谷口 ナタリア・白 曉萌

SAITO Keita・KOGA Masahiro・TANIGUCHI Natália・BAI Xiaomeng

### 要 旨

本稿では、多文化共生の町として知られる静岡県浜松市において、外国人住民支援機関に加え、外国人住民、日本人住民に聞き取り調査を行うことにより、外国人住民の言語環境や日本人住民との交流の現状について考えた。市内の国際交流協会では外国人住民への幅広いサポートを行っていること、NPO 法人が運営する日本語教室は、団体の違いが教室の教え方の違いにつながり、外国人住民の選択の幅を広げていることがうかがえた。また、外国人住民（ブラジル人住民）と日本人住民に聞き取り調査を行った結果、今回話を聞いたブラジル人住民については高度な日本語能力を身に付けたり、日本人住民と積極的な交流を持たなくても浜松では生活できるという声があり、日本人住民からも外国人住民とは学校などを除くと日常生活においてはあまり付き合いがないという意見を得た。

### 1. はじめに

日本で生活する外国籍の住民やその子どもたちなど、海外にルーツを持つ者は年々増加している。出入国在留管理庁による日本国内の在留外国人数（外国籍の中長期在留者および特別永住者の総数）をみると、2022 年 12 月現在のデータではその数は 3,075,213 人で、新型コロナウイルス感染拡大の時期を経たにもかかわらず過去最高となった。近年新たな在留資格「特定技能」「特定活動（46号）」などが新設されたことを鑑みると、引き続き増加することが予想される。そのような中で、多様な文化的背景を持つ住民同士が共に生活していく「多文化共生」が叫ばれて久しい。海外にルーツを持つ者が多く暮らす地域として東京や大阪などは容易に想像できるかもしれないが、製造業の盛んな地方都市の多くもそうで、本稿で取り上げる静岡県浜松市もその一つである。浜松市は、約 30 年前から外国人住民が急増したことから、多文化共生に対する取り組みを行ってきた。

## 2. 浜松市概要

浜松市は静岡県西部に位置し、人口は 789,478 人（2023 年 12 月現在<sup>\*1</sup>）と静岡県内では最も多い人口を抱える。浜松市は自動車メーカーのホンダやスズキ、楽器メーカーのヤマハやカワイといった大企業の創業地であり、現在もこれらの本社や工場などが置かれており、その下請け企業なども多く存在する工業都市である。1990 年に出入国管理及び難民認定法（入管法）が改正されたことにより、海外で暮らす日系人（3 世まで）の日本国内での就労が職種を問わず可能となったことから、特に当時経済状況が悪かったブラジルを中心とした南米諸国から、職を求めて来日するようになった。上記の通り多くの工場が存在する浜松市も、入管法改正前の 1989 年はブラジル人人口が 146 人だったのに対し入管法改正翌年の 1991 年には 4,072 人に急増した（公益財団法人浜松国際交流協会 2018: 140）。このような経緯から、外国人集住地域の一つとして知られることとなった。現在では 28,692 人の外国人住民（2023 年 12 月現在<sup>\*2</sup>）が暮らしている。中でもブラジル人は最も多く、出入国在留管理庁の 2022 年 12 月現在のデータでは 10,122 人であり、次に多いフィリピン人の 4,228 人の倍以上多い。なお、浜松市は日本一多くのブラジル人人口を抱える市である。そのため、市内を歩くと数多くのポルトガル語による表示が目に入る。浜松市などの公的機関が言語サービスの一つとして設置した「公的表示」からブラジル人利用者が多い商店などに掲げられた「私的表示」に至るまで、実に様々なポルトガル語表示が見られる。図 1 は浜松駅北口ロータリーに見られる日本語とポルトガル語による禁止表示である。なお、浜松市に見られるポルトガル語表示の多さについては、斎藤（2019）が浜松駅周辺で見られる公的表示の 18.6%、私的表示の 21.9%がポルトガル語表示であることを示している。



図 1. 浜松市内に見られるポルトガル語表示

\*1 浜松市 HP「人口・世帯」（[https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1\\_jinkou-setai/002\\_jinkou.html](https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1_jinkou-setai/002_jinkou.html)、2023/12/10 閲覧）

\*2 注 1 に同じ

また、数の上ではブラジル人が圧倒的に多いものの、82もの多様な国からやってきた人々が浜松市で生活しており<sup>\*3</sup>、まさに多文化なまちであるといえる。

### 3. 目的及び調査概要

本稿では、そのような浜松市において、主に言語面に着目しつつ、浜松市内の外国人住民への支援について調査し、さらに外国人住民と日本人住民へのインタビューから、浜松市の多文化共生について考察することを目的とする。

調査は筆者（斎藤・甲賀・谷口・白）が2020年3月21日～3月23日に浜松市で実施した。浜松で活動する外国人支援機関でのインタビュー調査を行うとともに、浜松在住の外国人住民（ブラジル人住民）及び日本人住民にも簡単なインタビュー調査を依頼し、外国人住民の言語に関する現状や住民同士の交流について聞き取りを行った。

### 4. 外国人住民支援機関

本調査で訪問した外国人支援機関は3か所であった。1つ目が公益財団法人浜松国際交流協会（以下「HICE」）、2つ目がNPO法人日本語教育ボランティア協会（以下「ジャボラNPO」）、3つ目がNPO法人浜松日本語日本文化研究会（以下「にほんごNPO」）である。以下で、まずHICEについて述べ、その後2つのNPO法人が運営するそれぞれの日本語教室について言及する。

#### (1) HICE

まず、HICEとは、公益財団法人浜松国際交流協会（Hamamatsu Foundation for International Communications and Exchanges）の略称で、浜松市において「市民レベルでの国際交流及び多文化共生の推進母体として情報提供、相談業務、文化紹介などの各種講座研修やイベントなど、国際交流の推進と地域の共生社会づくりを目指している」団体である<sup>\*4</sup>（図2）。1982年に任意団体として設立され（公益財団法人浜松国際交流協会2018:154）て以来、市内で生活する外国人住民に対し様々なサービスやイベントを提供している。

HICEでは、国際交流及び多文化共生の推進するため、2つの市の施設の運営や複数の事業に取り組んでいる。HICEが運営する市の施設には「浜松市多文化共生センター」、「浜松市外国人学習支援センター」があり、いずれも浜松市に住む外国人住民を支援するものである。特に、浜松市多文化共生センターで行われている「ワンストップ相談」は、外国人が集住する浜松市において大きな役割を担っているようである。この「ワンストップ相談」とは、外国人住民のそれぞれの母語で、さまざま

<sup>\*3</sup> 注1に同じ

<sup>\*4</sup> HAMAPO はままつ多文化共生・国際交流ポータルサイト（<https://www.hi-hice.jp/ja/organization-overview/about-us/hice/>、2023/12/10 閲覧）



図2. HICE 外観 (2020年3月23日撮影)

な相談を多文化共生センターで行うことができるというものである。窓口での対応言語はポルトガル語・英語・中国語・スペイン語（ポルトガル語での対応）・タガログ語・ベトナム語・インドネシア語で、これらの言語であれば対面で相談することができ、これに加えて韓国語・タイ語・ネパール語はテレビ電話で通訳を介して相談できるという。もちろん、各言語いつでも対応可能というわけではないが、ポルトガル語や英語などは週5日相談ができるため、外国人住民にとっては心強いだろう。

また、既述の通り、HICE では市の施設運営だけでなく、多数の事業にも取り組んでいる。例えば、「メンタルヘルス相談」、「ペアレント・トレーニング」、「地域共生事業」、「日本語ボランティア養成講座」などである。それぞれを以下で簡単に紹介する。

【メンタルヘルス相談】:主にブラジル人住民が対象。カウンセリングや浜松市精神保健福祉センターへの同行通訳を行う。

【ペアレント・トレーニング】:子どもが発達障害ではないかという相談が多く、それに対して親のトレーニングを行う。

【地域共生事業】:外国人住民も住む各団地へ支援を行う。例えば、以前作成された文書をどのように訳すのが適切か、外国人住民とどのように接すればよいかといった日本人からの相談に応じている。

【日本語ボランティア養成講座】:全16回にわたって多言語共生について講座を行う。

HICE が行う事業は、外国人住民だけでなく、日本人住民に対しても支援がなされていることがわかる。このように、HICE は施設運営や多数の事業への取り組みによって浜松市において国際交流、地域の共生社会づくりのために大きな役割を担っているのである。

## (2) NPO 日本語教室

ジャボラ NPO とにほんご NPO はどちらも浜松市が活動拠点であるが、それぞれには「色」の違いがみられた。本稿では、筆者（甲賀）の視点からみた両者の「色」を紹介する。なお、いずれも日本語教室運営以外の事業も行っているが、本稿では筆者らの関心の中心である日本語教室について取り上げる。

まず、ジャボラ NPO は浜松で活動する地域日本語ボランティア教室である（図 3）。スタッフは 20 人程度であるというが、ジャボラ NPO の特色として、この教師全員が有資格者あるいは資格取得のために勉強中であるということが挙げられる。また、テキストも受講生のニーズに合わせるため、オリジナルテキスト『ドキドキワクワクにほんご』を使用している。『ドキドキワクワクにほんご』は、タスク先行型を基本に部分的に文法積み上げ型を採用したテキストになっており、4 段階のレベルが用意されている。また、地域に特化した内容（富士山、うなぎなど）や、災害に疎い受講生のために、地震や台風、それにまつわる買い置きなどの内容が盛り込まれている。このように、ジャボラ NPO の日本語教室は単なる地域の日本語ボランティア教室に留まらない、浜松市という環境に特化した日本語教育が受けられるのが、「色」と言えるだろう。



図 3. ジャボラ NPO の授業風景（2020 年 3 月 21 日撮影）

にほんご NPO はある公民館が日本語教室をやりたいと HICE に相談したことがきっかけで、2001 年に設立されたという（図 4）。日本語の授業は大人クラス（週 2 日の日本語教室）と子どもクラス（外国にルーツを持つ子どもの取り出し授業）、企業への出張授業を行っており、本調査では大人クラスを見学した。大人クラスでは、JLPT（日本語能力試験）N5~N1 のレベル別で授業が行われ、各レベルには 2 人の担当者がおり、毎回どちらかが担当するという。基本的に、教師は有資格者であるため、にほんご NPO として統一したカリキュラムを作るのではなく、授業内容は教師の裁量に委ねるという形態であった。つまり、受講生に対して柔軟な対応ができるということだろう。また、受講料は都

度払いであるため、自分の都合に合わせて参加できるようになっていた。このように、にほんご NPO では、受講生の都合に合わせてやすいというのが「色」として見受けられた。



図 4. にほんご NPO の授業風景 (2020 年 3 月 22 日撮影)

ここでは、NPO 法人が運営する 2 つの日本語教室を概観した。どちらにもそれぞれ「色」があり、日本語を勉強したい外国人住民が自分の好みや学習スタイルに合わせて日本語教育を受けられる環境であることがうかがい知れた。また、本調査では 2 つの日本語教室しか訪問することがかなわなかったが、浜松市内には他にも多数の日本語教室が存在する。当然のことながら、それぞれの日本語教室には「色」があるだろう。それぞれの日本語教室の「色」を把握することを通じて、外国人集住地域であり、地域日本語教育が盛んな浜松市においてどのような支援がなされているかという全体像を明らかにし、他の地域に参考として提示できるようにする必要があるだろう。

## 5. ブラジル人住民

本節では、ブラジル住民に対して行ったインタビューについて述べる。インタビュー調査は、主にそれぞれの浜松での生活と日本語の使用に関して尋ねる半構造化インタビューの形式である。

### (1) ブラジル料理店で働くブラジル人住民

まず、多国籍な食料品や日用雑貨を扱うほか、本格的なブラジル料理を提供している「セルヴィッター」にて行った調査について記す (図 5)。ここのブラジル料理を求め、セルヴィッターには多くのブラジル人住民が集まるといふ。ブラジル人である筆者 (谷口) の目から見ても、ポルトガル語の音楽も流れ、ブラジルの雰囲気が感じられる場所であった。

このセルヴィッターでは、4 人のブラジル人住民にインタビューを行った。1 人目は、日本滞在歴が約 10 年の女性店員 (調査当時 30 代後半) であった。彼女は長く日本に滞在しているにもかかわらず、

日本語はあまり学習していないという。その一方で、日本語が全く不要とはとらえておらず、2人の子どもにはブラジル人学校ではなく、日本の高校と保育園に通わせていた。つまり、彼女自身は日常的にはブラジル人の知り合いや客との接触が少なく、母語のみで生活しているが、子どもたちは家庭外では日本語、家庭内ではポルトガル語で過ごしているということである。

次にインタビューを行ったのは長年、セルヴィツで店員として働いている男性（調査当時30代後半）である。彼は、先の女性店員とは異なり、JLPT（日本語能力試験）N4程度の日本語能力は有していた。N4程度、つまり初級レベルであるが、彼はこれ以上の日本語レベルの向上は目指していないという。なぜなら、2節で述べた言語景観からも分かる通り、浜松市の主な施設やサービスの案内はポルトガル語に翻訳されているからである。さらに、4節で述べたポルトガル語通訳者の存在も大きいという。彼のインタビューからは、浜松市はポルトガル語による支援が充実しているため、高いレベルの日本語を必要としていない様子がうかがえた。

上記の2人は自身の日本語学習の必要性をそれほど重要視していなかった。その一方で、アルバイトとして働く17歳の女性店員は日本語が必要不可欠だと考えていることを聞くことができた。彼女は、中学校までブラジルにおり、高校から来日し、日本の高校に通っていた。日本の高校に通うためには日本語が必要であり、また、日本での生活においても日本語が必要不可欠であると感じたという。そのため、日本語を勉強することを決心したようである。調査当時にはすでに、彼女は日本人客に対するレジ会計も日本語で円滑に済ませることもできていた。

セルヴィツ経営者の男性もまた、接客や仕事上のやり取りで日本語が必要であるため、日本語もポルトガル語も流暢であった。



図5. セルヴィツ（Servitu）食材ショップ・レストラン（2020年3月23日撮影）

## (2) 日本人経営の土産物店に勤めるブラジル人住民

日本人が経営する「カワイ衣料」で働くブラジル人女性にもインタビュー調査を行った。カワイ衣

料は祭用品、作業着、和雑貨等外国人向けのお土産を扱っている店である（図6）。そこには、長く店員として働いているブラジル人女性（調査当時50代）がおり、彼女へインタビューを行った。

彼女は日系人のため、来日前から家庭内で日本語を聞きながら育っていた。また、来日後もテレビや職場で日本語を学び、現在では接客のための日本語はもちろん、日本人の友人との会話も何不自由なく行えるという。なお、テレビや職場で日本語を学んだと述べた通り、日本語教室に通っていない。というのも、来日してすぐ通った日本語教室では接客のための日本語を学ぶことができず、自分にとって必要な内容ではなかったからである。そのため、日本語教室へ通うのを止めたと言っていた。

現在、彼女は、上述のような日本語教室の存在は知ってはいるものの、通うつもりはなく、若者が多く通っている場所だと述べていた。さらに、若い外国人にとっては出世するために日本語を学ぶことは、重要な手段であると考えているようであった。



図6. 祭りのカワイ衣料 & KAWAI SOUVENIR (2020年3月22日撮影)

### (3) 日本人経営の理容室に勤めるブラジル人住民

次にインタビュー調査を行ったのは「ファミリーサロンラッキー浜松駅前店」である。ファミリーサロンラッキーは中部地方から九州地方にかけて展開するヘアサロン店であるが、浜松駅前店では図7にもみられるように、ポルトガル語でのメニューも書かれており、ブラジル人客が利用することがわかる。ここでは1人のブラジル人女性美容師（調査当時30代）に話を伺った。彼女はブラジルでの日本語学習経験はなかったが、浜松に移住後数か月間、HICEが運営する日本語講座を受けていたようである。彼女は就職先で用いるコミュニケーションを学びたいと考えていたが、授業内容は想像していたものとは違ったこと、働き始めてから日本語の勉強に割く時間がなくなったことにより日本

語学習を諦めてしまい、結局日本語レベルは初級のままになっていると語っていた。

しかし、彼女は日本語が不要であるどころか、現地語学習の重要性を強調するように語っていた。浜松市では既に述べた通り、ポルトガル語のサービスが充実している。しかし、いくらポルトガル語訳や通訳が提供されていても、やはり現地語の学習は重要であると考えているという。なぜなら、普段の生活において誤った、あるいは不自然な日本語を使用しても、それを指摘してくれる人、正しい日本語に修正してくれる人がいないからである。また、より良い職場を目指すにしても、日本語能力が転職の壁になってしまうという。そのため、彼女は職場で流暢に話せるようになること、もしくは会話を完全に理解できるようなコースを受講することを望んでいると述べていた。とはいえ、日々の職場の同僚との会話によって、自分の日本語能力は向上しているという実感はあり、限られた日本語であっても、徐々に美容院の接客なども任されるようになってきたという。



図7. ファミリーサロンラッキー (Family Salon Lucky Hamamatsu) (2020年3月22日撮影)

## 6. 日本人住民

最後に、本節では日本人住民へのインタビューについて記す。浜松出身の日本人住民に対し、外国人住民との関わりなどについて尋ねた。

### (1) ブラジル料理店で働く日本人住民

まず、上述のセルヴィッターで働く日本人女性に対するインタビューを記す。彼女は3年前に求人を見てセルヴィッターで働き始めたという。筆者(斎藤)は2013年より度々セルヴィッターを訪れているが、

ここの食料品コーナーは主にブラジルを中心とした南米の食材を扱っているにもかかわらず、本調査で訪れた際にはベトナムやタイなど東南アジアの食材の販売が目立つようになっていたため、その理由を尋ねると、近年はベトナム、タイ、インドネシアなどの購買客が増加してきた影響で今はほとんどがそれらの国のものになっていると語った。また、イベントでベトナム人を呼んでベトナム、フィリピン、インドネシアなどの料理を提供し、さらに、サンパフェスティバルでは最近売れ行きがよくなかったため2019年は出店を見合わせたそうである。統計の上ではまだまだブラジル人が多いが、技能実習生や特定技能といった在留資格でベトナムやインドネシアなどの他国から来日するものが浜松でも増えており、それに伴いブラジル以外の国々の比率が上がったために店の方針にも影響を与えたということであろう。なお、そのような中でも店員はこれまでほとんど変化がなく、ほとんどブラジル人であるようだ。

このように店員としては多くの外国人住民と関わっている彼女であるが、仕事以外ではどうなのか、またここで働く以前はどうだったのかを尋ねたところ職場以外ではあまり外国人住民との関わりはないとのことである。これまでも、学校にブラジル人の生徒がいるということもあったようであるが、特に積極的に交流する機会があったわけでもないとのことだ。

## (2) 土産物店を経営する日本人住民

次に、上述のカワイ衣料の経営者である日本人男性についてのインタビューについて記す。彼は60代（調査当時）であり、ブラジル人が増加する前から浜松を見てきたが、以前より在日コリアンが多かったそうで、さらに前は九州から土木作業員が来ていたという。浜松は労働力としてやってきた人々で、以前から多文化だったことがうかがえる。そして、カワイ衣料では法被などの祭用品を販売しているが、外国人がそれらを見に来るようになったことから、日本土産や浜松土産も販売するようになった。そのような経緯から外国人労働者が日本土産を購入することが多いが、かつてはそのほとんどがブラジル人で、5節のブラジル人店員を雇うなどしている。ところが、上述のセルヴィツターの日本人店員の発言と同様に、最近ではブラジル以外の国である中国、ベトナム、フィリピン、インドネシアなどの出身者も増えているという。ただ、そのような中でも、やはりまだブラジルの影響力は強いそうで、工場労働者の中ではインドネシア人がブラジル人にポルトガル語で話している場面もあるようだ。5節のブラジル人住民のインタビューにおいて、浜松ではポルトガル語で十分生活していけると語っている者がいたが、他国出身者がポルトガル語を用いるほどにポルトガル語の存在が大きいことを物語っている。なお、ブラジル人集住地域においてブラジル人以外の外国人がポルトガル語を用いる事例は斎藤（2015）でも報告されている。

## 7. まとめ

以上、浜松市で活動する外国人住民支援機関、浜松市のブラジル人住民及び日本人住民に対してイ

インタビューを行った結果、以下のことが明らかとなった。

- ①教え方にそれぞれ特色のある日本語教室があり、また地域日本語教育以外にも様々な言語面でのサポートが用意されていること
- ②ブラジル人住民には日本語学習の重要性を認識しつつも、日本語教室で学べる日本語が自らのニーズに合っていないと感じている者がいること
- ③近年はブラジル人以外の外国人住民の増加により、従来のブラジル人コミュニティに変化が起こりつつあること
- ④当事者が積極的に関与しない場合は、外国人住民と日本人住民との交流はあまりないということ

このうち④に関しては、外国人集住地域であり日本一のブラジル人住民を擁する自治体としては意外に感じるかもしれない。しかし、これは丹野（2018、2022）が、浜松市の住民の意識実態調査の結果を踏まえて外国人住民と日本人住民の付き合いが少ないと指摘している点と一致する。この傾向は以前から現在に至るまで変わっていないようである。このようなことは浜松市以外の外国人集住地域でも見られることは筆者（斎藤）が他の外国人集住地域で行った聞き取り調査でも確認している。

今後の課題としては、現在も本当にブラジル人住民の日本語学習のニーズと地域の日本語教室が提供するものにずれがあるのかを検証することが挙げられる。現在、日本語教育においては、生活者向けや労働者向けの日本語教育など多種多様なニーズに合わせたものが存在している。インタビューに応じたブラジル人住民が日本語教室を去ったのはしばらく前のことであり、現状は変わっている可能性がある。今回訪問できなかつた様々な日本語教室も含めてこのような点を再確認する必要がある。

## 謝辞

本研究に協力していただいた公益財団法人浜松国際交流協会、NPO 法人日本語教育ボランティア協会、NPO 法人浜松日本語日本文化研究会、セルヴィツォー、カワイ衣料、ファミリーサロンラッキー（敬称略、順不同）の皆様に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 公益財団法人浜松国際交流協会（2018）『世界の人と暮らして―浜松国際交流協会 35 年のあゆみ―』、公益財団法人浜松国際交流協会
- 斎藤敬太（2015）「ブラジル人集住地域のリングフランカー群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較―」『日本語研究』35、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.43-57
- 斎藤敬太（2019）「ブラジル人集住地域の言語景観に採用された言語に関する定量的研究」ロング、ダニエル・中井精一監修、李舜炯編『都市空間を編む言語景観』、中文出版社（韓国）、pp.121-146

丹野清人 (2018) 「2018 年度意識実態調査から見えてくる浜松の未来」 浜松市企画調整部国際課『浜松市における日本人市民及び外国人市民の意識実態調査 報告書』、pp.6-10

丹野清人 (2022) 「2021 年度意識実態調査から考える浜松と日本の未来」 浜松市企画調整部国際課『浜松市における日本人市民及び外国人市民の意識実態調査 報告書』、pp.6-12

#### 参考 HP

出入国在留管理庁「在留外国人統計（旧登録外国人統計）在留外国人統計 月次 2022 年 12 月」

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=24101212&tclass1=000001060399> (2023/12/10 閲覧)

HAMAPO はままつ多文化共生・国際交流ポータルサイト <http://www.hi-hice.jp/index.php> (2023/12/10 閲覧)

浜松市 HP「人口・世帯」[https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1\\_jinkou-setai/002\\_jinkou.html](https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1_jinkou-setai/002_jinkou.html)  
(2023/12/10 閲覧)